

- ③ 初回投与量とその設定根拠
- ④ 投与経路及び速度
- ⑤ 投与期間と観察期間
- ⑥ 用量群ごとの被験者数
- ⑦ 同一用量群内の被験者への投与順序及び間隔
- ⑧ 用量漸増の手法
- ⑨ 次の用量群への移行基準
- ⑩ 投与中止基準，休薬基準，再開基準
- ⑪ ⑧～⑩の判断根拠となる安全性評価手法
- ⑫ 被験者への投与，用量漸増及び臨床試験の変更又は中止手順及びそれらを決定する体制と責任の所在

近年、多くの基礎研究者や製薬企業各社が、治療効果の期待される多くの医薬品候補物質を探索している。精神・神経領域における治験をより効率的に推進するためには、医薬品の候補となる化学物質がはじめに人間に投与する前に、適切な生物学的検討が必要である。

D. 健康危険情報

なし

E. 研究発表

なし

F. 知的財産権の出願・登録状況

- 1. 特許取得 なし
- 2. 実用新案登録 なし
- 3. その他 なし

### Ⅲ. 資料

## 第2回CRT入門講座ワークショップ

# 臨床研究デザインコース入門編開催のお知らせ

本ワークショップは、臨床研究に関心のある医師、コメディカル、医学系研究者の方を対象に、臨床技能の質を高める上でも大切な臨床研究の基礎や研究倫理を学んでもらうことを目的とします。

講義と小グループによる演習を通して、漠然とした臨床疑問を構造化されたリサーチ・クエスチョンとして変換し、グループ単位で発表します。

本ワークショップ修了者には修了証を発行します。

### 概要（到達目標）

臨床研究の意義について理解すること

臨床疑問を研究可能なリサーチ・クエスチョンとして変換できるようになること



### 【講義】

臨床研究の歴史、意義、研究の形式化

臨床研究のデザインと統計学

研究倫理の歴史と基本原則

嚥下障害患者の診療が臨床研究になるまで

脳卒中領域における臨床研究について：神経超音波と脳卒中診療

体制の構築

臨床研究ガイドラインの近年の動向

### 【演習】

臨床疑問を整理する

リサーチクエスチョンとして定式化する

模擬研究テーマ発表会

### 特別講師

井口 保之 川崎医科大学脳卒中医学教室 准教授

田代 志門 昭和大学 研究推進室 講師

開催日時：2012年7月5日（木）～6日（金）

場 所：国立精神・神経医療研究センター  
研究所3号館1階セミナー室

トランスレーショナル・メディカルセンター 事務局

問合せ先(mail) [tmcrcrt@ncnp.go.jp](mailto:tmcrcrt@ncnp.go.jp)

## 第2回CRT実践講座ワークショップ



開催日時：2013年3月1日(金)  
～2日(土)

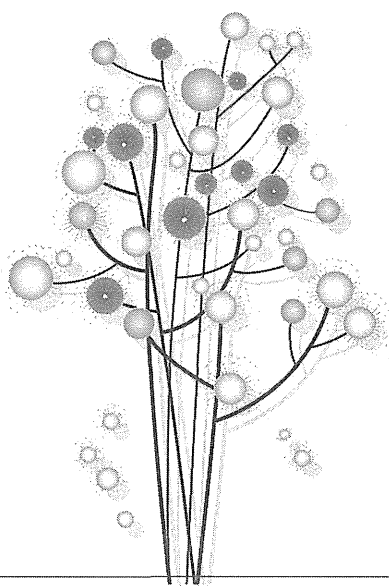
本ワークショップは、臨床研究の経験をもつ、あるいは臨床研究を行う予定のある医師、コメディカル、医学系研究者の方を対象に、臨床技能の質を高める上でも大切な臨床研究の応用や研究倫理を学んでもらうことを目的とします。

講義と小グループによる演習を通して、漠然とした臨床疑問を構造化されたリサーチ・クエスチョンとして変換し、グループ単位で発表します。

### 概要（到達目標）

コホート研究、横断研究の特徴について理解すること

上記研究の立案、計画、実施、データ解析に関する知識を習得すること



### 【講義】

横断研究をデザインする

バイアス、その対処法

遺伝子解析研究における試料提供とインフォームド・コンセント  
社会への橋渡しとしての疫学研究

コホート研究をデザインする

STROBE声明を念頭においた論文の書き方

臨床の中から新規治療法を開発する

### 【演習】

よいリサーチクエスチョン

リサーチクエスチョンを構造化する

臨床研究のプロトコルを書く

模擬ピアレビュー委員会

### 特別講師

中村 好一 自治医科大学 教授

上原 里程 自治医科大学 准教授



場 所：東京都小平市小川東町4-1-1  
国立精神・神経医療研究センター  
研究所3号館 セミナールーム

定 員：30名（予定）申し込み順 定員になり次第受付終了

費 用：20,000円（テキスト代含む）

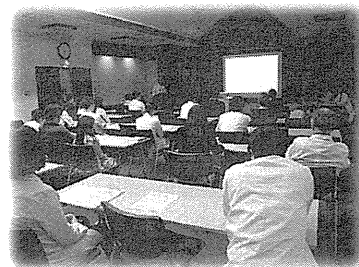
受講登録：<https://ncnp.smktg.jp/public/eminar/view/34>

備 考：パワーポイントを用いたプレゼンテーションを行いますので可能な方は  
ノートPCをご持参ください

問い合わせ先：TMC事務（E-mail：[tmccrt@ncnp.go.jp](mailto:tmccrt@ncnp.go.jp)）

# 2012年度若手育成カンファレンス

【会の目的】若手医師・若手研究者・レジデント・コメディカルスタッフ等が、個々の研究を発表し、相互討論することによって、研究の質の向上を目指す場を保障し、それをもって若手育成に資する場を設けること。



## 2012年度スケジュール

	開催日	発表1担当施設	発表2担当施設
第18回	4/13 (金)	若手研究グループ	精神保健研究所
第19回	5/11 (金)	若手研究グループ	神経研究所
第20回	6/ 8 (金)	若手研究グループ	病院
第21回	9/7 (金)	若手研究グループ	精神保健研究所
第22回	10/5 (金)	若手研究グループ	神経研究所
第23回	11/2 (金)	若手研究グループ	病院
第24回	12/7 (金)	若手研究グループ	TMC
第25回	1/11 (金)	若手研究グループ	CBT

開催場所：コスモホール

開催時間：17:15～

トランスレーショナル・メディカルセンター (TMC)

問合せ先：内線7821

## 第18回 若手育成カンファレンス報告書

2012年4月13日、第18回若手育成カンファレンスとして、精神保健研究所の本間元康さん、若手研究グループの本田涼子さん及びTMC臨床研究支援室の立石智則さんの3名より発表が行われました。

### 「乳児難治てんかん患者の脳波における高周波解析および高密度脳波計の開発」

本田 涼子 (若手研究グループ 病院 小児神経診療部)



本田さんらはてんかん患者の脳内病変部位を簡便かつ非侵襲的に検査を行うために、従来と比較してより多くの箇所での脳波を測定できる脳波測定キャップを作成し、実際に3名の患者さんでの測定を行いました。測定データから推測される病変部位はMRI画像によって確定された病変部位とほぼ一致しており、この脳波測定方法の有用性が示唆されました。

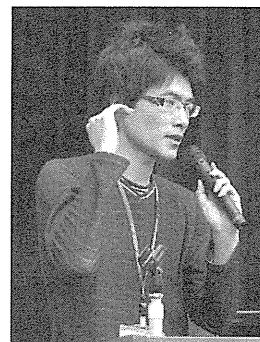
また、開発にあたっての問題点とその克服に至る流れについてもお話頂き、大変示唆に富んだ発表となりました。

### 「巨大地震における平衡感覚機能の異常」

本間 元康 (精神保健研究所 成人精神保健研究部)

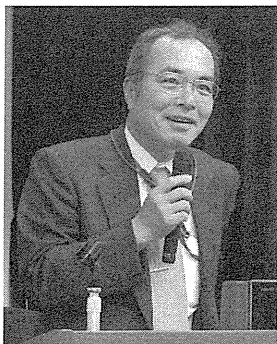
昨年発生した東日本大震災以降、めまいを訴える人が増加していることから、本間さんは「余震を繰り返し経験したグループ(地震群)」と「余震をほとんど経験しなかったグループ(統制群)」について、平衡感覚機能及び心理的ストレス指標を比較し、めまいの発生機序を検討しました。

心理的ストレス指標においては両群間に有意差が認められなかったものの、平衡感覚機能に差異が認められ、また、その異常の程度はストレス指標と相関関係にあったことから、余震による物理的な影響が心理的ストレスによって増幅されている可能性が示唆されました。



### 「当センター病院で実施予定の医師主導治験(早期探索的臨床試験)について」

立石 智則 (TMC 臨床研究支援部)



我が国は基礎研究の分野においては世界でもトップクラスの実績を示す一方、基礎研究から得られた医薬品候補物質(シーズ)を実際に医薬品として実用化することが大きな課題となっております。TMC臨床研究支援室は当センターにおける医薬品開発を支援する役割を担っており、発表では臨床研究支援室の活動概要と、現在支援を進めている早期探索的臨床試験についてお話頂きました。

## 第19回 若手育成カンファレンス報告書

2012年5月11日、第19回若手育成カンファレンスとして、神経内科免疫研究部 荒浪利昌さん、若手研究グループの森まどかさんの2名より発表が行われました。

### 「難治性 NMO に対する抗インターロイキン6 受容体抗体（トシリズマブ）療法」

荒浪利昌（神経研究所 免疫研究部）



荒浪さんは難治性視神経脊髄炎（NMO）患者に対して、関節リウマチ薬で IL-6 シグナルをブロックする薬剤である抗 IL-6 受容体抗体を投与することによる安全性と有効性を評価する研究についての概要について説明されました。また、今回のご発表では参加者のうち1症例の結果を例に、薬の有効性についての解説もいただきました。また、NMO の発症メカニズムについての解説や今後の研究の方向性についてもお話し頂き、大変示唆に富んだ発表となりました。

### 「GNE ミオパチー（縁取り空胞を伴う遠位型ミオパチー）についての新たな知見」

森まどか（若手研究グループ 病院 神経内科診療部）



森さんは、若手研究グループで縁取り空胞を伴う遠位型（GNE）ミオパチー患者の歴史的対照群・症状評価指標の確立に取り組まれており、進捗状況とその成果についてご発表いただきました。アンケート調査や後ろ向きカルテ調査によって、GNE ミオパチーの症状と遺伝子変異ドメインとの関連が明らかになる一方で、経時変化については症状が多様であることを示されました。こうした結果を踏まえて現在取り組まれている、前向き自然歴調査の進捗状況についてお話いただきました。

また、若手研究グループに参加してよかった点、TMC への要望、今後の展望などについてもお話しいただき、これまでの研究活動についても振り返っていただきました。

## 第20回 若手育成カンファレンス報告書

2012年6月8日、第20回若手育成カンファレンスとして、病院 歯科 福本裕さん、若手研究グループの伊藤淳子さんの2名より発表が行われました。

### 「精神科病棟における転倒転落防止指導効果」

伊藤 淳子（病院 医療安全管理）



精神疾患患者は、精神症状の悪化や内服薬の影響による身体症状の変調のために転倒転落事故の発生リスクが高く、その予防は精神科看護においても大きな課題です。

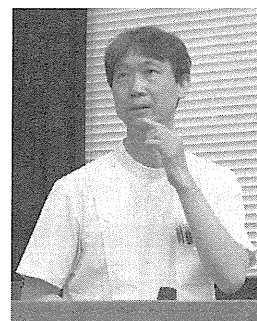
伊藤さんらは、若手研究グループにおいて精神科病棟に入院中の患者に対する転倒転落防止について取り組まれています。今回の発表では、この研究に先立って開発した転倒転落の危険性に関するアセスメント方法を用いて、転倒転落防止のための介入研究の成果についてご発表いただきました。

今回の介入研究では、その有効性は明らかになりませんが、患者および看護師等スタッフの意識の変化や介入に集団療法を用いた利点など質的な変化についても考察されており、今後の取り組みに向けての可能性が示唆される発表でした。

### 「当院における重症心身障害児（者）の口腔咽頭由来菌について —特に誤嚥性肺炎への影響—」

福本 裕（病院 歯科）

重症心身障害児に対する院内感染の予防は病院全体として取り組むべき課題です。福本さんは、口腔咽頭由来菌についての調査を実施され、さらにそれらの菌が病原性として誤嚥性肺炎の起因菌（以下、起因菌）の供給源となるかについて検討されました。食事摂取に経鼻経管栄養を用いられている患者に対し口腔咽頭由来菌が誤嚥性肺炎の起炎菌と共通菌種が認められており、誤嚥性肺炎の起炎菌は医療行為による影響を受けて供給源となっている可能性について考察されました。



また、重症心身障害児のみならず ADL の障害が大きいパーキンソン病患者においても誤嚥性肺炎の問題は大きく、今後の課題の方向性についてもご紹介いただきました。



## 第 21 回 若手育成カンファレンス報告書

2012年9月7日、第21回若手育成カンファレンスとして、若手研究グループの岩田恭介さん、精神保健研究所の元村祐貴さんの2名より発表が行われました。

### 「Duchenne 型筋ジストロフィーの立位訓練における主観的疼痛評価の有用性」



岩田恭介（病院 リハビリテーション）

Duchenne 型筋ジストロフィー（DMD）患者の多くに側彎（脊柱が横方向に湾曲する症状）の進行がみられ、呼吸器の圧迫など様々な悪影響を引き起こします。側彎の進行予防には立位訓練と呼ばれるリハビリ療法が有効ですが、DMD の進行により疼痛を伴うことから、病状の進行した患者さんでは中止を余儀なくされます。しかし、これまで立位訓練の継続・中止を判断する基準は存在しませんでした。

岩田さんらは、DMD 患者に対する立位訓練時の疼痛に注目し、「痛みの強度」と「立位訓練の実施可能性」間の相関性を評価することで、立位訓練の実施（中止）判断基準を検討しました。研究の結果、主観的な痛みの強度と立位訓練の実施可能性には強い相関が認められ、立位訓練の継続・中止を判断する上での基準となる cut-off 値を導きました。また、立位訓練時の痛みの強度は足関節の背屈角度（つま先を上にした際の足首の角度）と有意な相関が認められたことも併せて報告を行いました。



### 「睡眠負債は扁桃体-前帯状皮質間の機能的結合の減弱を介して、ネガティブな情動反応を惹起する」

元村祐貴（精神保健研究所 精神生理研究部）

睡眠が不足すると眠気や精神運動機能の低下に加えて、不安や混乱などの情動的な不安定性が増大することが知られています。睡眠の不足はわずかなものであっても日々蓄積され、こうした状態を睡眠負債と呼びます。

元村さんらは健常成人 14 名を対象に睡眠負債状態での脳の活動状態を調査したところ、不安、眠気の増加が認められ、扁桃体における活動の増強が認められた反面、その扁桃体と機能的、解剖学的なつながりをもち、情動の制御を担っているとされている前帯状皮質と扁桃体との間の機能的結合性が低下していることが明らかとなりました。また、この機能的結合性の低下は扁桃体の活動亢進及び主観的な気分の悪化と有意に相関しており、このような情動制御の機能的変化が睡眠負債時の情動的な不安定性の神経基盤の一部を構成しているのではないかとの見解を示しました。

## 第 22 回 若手育成カンファレンス報告書

2012 年 10 月 5 日、第 22 回若手育成カンファレンスとして、若手研究グループの山野真弓さん、神経研究所疾病研究第五部 長野清一さんの 2 名より発表が行われました。



### 「統合失調症に対する感覚調整法の開発と有効性についての研究」

山野 真弓（病院 リハビリテーション）

欧米において薬物による鎮静や行動制限の代替医療として用いられている感覚調整技法は、感覚刺激の量や質をコントロールすることによって鎮静化を図るものです。我が国への感覚調整技法の導入をめざし、当院の医療観察法病棟に感覚調整室が開設されました。

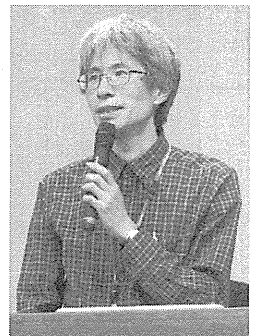
山野さんは、若手研究グループにおいて、感覚調整技法の有効性についての予備的研究に取り組まれています。今回の発表では、その効果についてご発表いただきました。通常のリラクゼーションと感覚調整技法の有効性については同等の効果が得られることがわかりました。初めて導入する技法なのでその安全性について評価するために、限られた条件の中での予備研究でしたが、より実用的な運用に向け、今後の取り組みに向けての可能性が示唆される発表でした。また、フロアからも有効性の検証は非常に難しいことや、研究同意取得の難しさについてもディスカッションされ、活発な意見交換が行われました。

### 「筋萎縮性側索硬化症の発症原因の解明に向けて—TDP-43 の機能解析を中心に—」

長野 清一（神経研究所 疾病研究第五部）

筋萎縮性側索硬化症（ALS）は運動神経の変性により全身の筋力低下をもたらす、まだ根本的な治療法は確立されていない疾患です。近年、ALS および前頭側頭型認知症（FTD）に共通して RNA 結合蛋白である TDP-43 の神経細胞内での異常沈着や、この遺伝子変異が見つかっており、TDP-43 の機能と ALS 及び FTD の発症との関連が注目されています。

長野さんらは、TDP-43 による神経突起内への RNA の運搬機能の低下が ALS 及び FTD の原因ではないかと考え、TDP-43 と結合して神経突起へ運ばれる RNA の特定を試みられました。その結果、リボソーム蛋白質の RNA が候補として検出され、TDP-43 とリボソーム蛋白質 RNA が結合すること、それらは神経突起で同じ部位に存在することが示されました。これらより、TDP-43 の神経での機能が低下すると神経突起での種々の蛋白質の合成能力が低下し、神経細胞そのものの機能が維持できなくなると推測されることや、これが ALS 及び FTD で神経変性が起こる原因となっている可能性、さらには診断や治療への応用の展望も含めてお話し頂き、大変示唆に富んだ発表でした。



## 第 23 回 若手育成カンファレンス報告書

2012 年 11 月 2 日、第 23 回若手育成カンファレンスとして、若手研究グループの大柄昭子さん、病院 野田隆政さんの 2 名より発表が行われました。

### 「看護の仕事量測定に関する文献検討」

大柄 昭子 (病院 看護部)

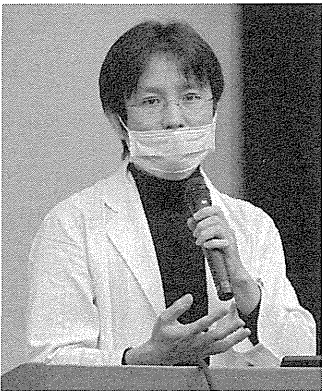


看護の仕事量の評価と業務量を適正に把握することは、医療環境を整備する上でも重要な情報となります。その測定方法は、再現性や信頼性の高いものが望ましいのは言うまでもありませんが、国内においていまだ統一されていません。

大柄さんは、日本における看護の仕事量を定量的に示す方法論を明らかにするために、文献の批判的レビューに取り組みました。その結果、ほとんどの文献は信頼性と妥当性に関する記述が乏しく、組み入れ可能な文献が 1 件しかなかったことを報告されました。看護の仕事量の評価と業務量の評価には、他施設との比較は難しい側面があること、そして測定方法の確立が困難であることについて考察されました。また、精神・神経領域の看護の特殊性を仕事量として測定することの課題についても述べられました。

### 「施術後 3 年間のデータから見る NIRS を用いた精神疾患の鑑別診断補助の現状および精神疾患の重症度評価の可能性」

野田 隆政 (病院 精神科)



当院では、2009 年 10 月より先進医療「光トポグラフィを用いたうつ症状の鑑別診断補助」の測定が始まり 3 年が経過しました。専門外来や検査入院を中心に実施されましたが、受診される患者さんは診断が困難な場合や治療抵抗例のように典型的な方は少ないのが現状です。

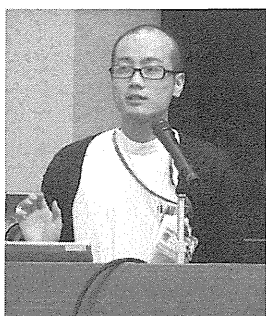
野田さんは、3 年間に先進医療を受けた 800 名を検討されました。典型的な症例を対象とした研究では、診断と波形の一致率は 6~8 割程度であるのに対し、先進医療では 4 割程度でした。不一致について検討した結果、臨床的にはうつ病である患者さんが NIRS で躁うつ病パターンとなる場合がかなりの割合で含まれていました。この違いが生じる理由を現在研究中ということでした。また、精神疾患の診断は、病状の経過をみて慎重にしなければいけません。さらに、うつ病と診断された患者さんの中にも潜在性の躁うつ病患者さんは含まれていることもあります。NIRS の結果を詳細に検討することで診断補助の有効性が高まるのではないかと、今後の展望を含めてお話いただきました。

## 第24回 若手育成カンファレンス報告書

2012年12月7日、第24回若手育成カンファレンスとして、若手研究グループの坂本岳之さん、トランスレーショナル・メディカルセンター 野口普子さんの2名より発表が行われました。

### 「ストレスケア病棟におけるオープン形態での集団認知行動療法の実施可能性の検討」

坂本 岳之 (病院 看護部)



精神疾患患者を対象とした認知行動療法は、個人を対象とした認知行動療法とともに集団認知行動療法 (CBGT) も有効であるといわれています。

坂本さんは、入院治療中の患者に対してCBGTの実施可能性について検討されました。患者の入退院の時期にばらつきがあるため、どこからでも参加可能なプログラムを考案されました。また、患者の診断名にこだわらず、精神疾患にある程度共通している症状に焦点を当てた内容にするなどの工夫がなされています。現在5クールが実施され、病棟でのCBGTの実施体制は整備されつつあります。今後の課題としては、CBGTの有効性も含めた検討、病棟や患者の特徴の変遷への対応、スタッフの入れ替わりや担当スタッフの育成への取り組みなど、より具体的なCBGT実施に向けて述べられました。

### 「交通外傷患者の過去のトラウマ体験が認知的評価に及ぼす影響についての検討」

野口 普子 (トランスレーショナル・メディカルセンター)



外傷後ストレス障害の認知モデルでは、否定的な認知的評価は症状の発症および持続に影響を及ぼすことが知られています。この認知的評価に影響を及ぼす因子には、過去のトラウマ体験が影響するといわれており、過去のトラウマ体験が認知的評価に影響を及ぼすか否かについて検討されました。

野口さんは、救命救急センターに交通外傷で入院した患者を対象に、過去のトラウマ体験の数と交通事故に関する認知的評価について検討したところ、過去のトラウマ体験数が多くなると外傷的出来事に関する評価が否定的になること示しました。今回は横断的な検討でしたが、過去のトラウマ体験の種類による影響や長期的な認知的評価への影響のなど今後の展望も含めてお話しいただきました。

## 第 25 回 若手育成カンファレンス報告書

2013 年 1 月 11 日、第 25 回若手育成カンファレンスとして、若手研究グループ・本田涼子さん、認知行動療法センター・中川敦夫さんの 2 名より発表が行われました。

### 「乳児難治てんかんの高密度脳波解析」

本田 涼子（病院 小児神経科）

乳児期発症のてんかんは、小児てんかんの中で最も頻度が高く、中でも器質異常に伴う症候性てんかんが約半数を占めています。通常用いられる 19ch の頭皮電極脳波は空間解像度が乏しく局在診断には十分とは言えません。近年では、空間分解能の高い高密度脳波記録を用いた脳波解析に期待が集まっています。

本田さんは、乳児難治性てんかん患者を対象として頭皮電極脳波のチャンネル数を 83ch に増やして高密度脳波記録を行い、非発作時脳波からてんかん性放電の電流源の推定を行いました。対象者自身の MRI を用いて解析することで、電流源は一定の広がりを持ったトポグラフィーとして示すことができました。そして、この結果を脳波と同時に記録した脳磁図 (MEG) の電流源解析結果と比較したところ、MEG の解析結果と微妙に異なることが示され、両者の電気生理学的な特性をよく示す結果となりました。



### 「認知療法・認知行動療法の有効性の確立と普及に取り組む」

中川 敦夫（認知行動療法センター）



うつ病は身体疾患と比較しても非常に多い精神疾患の一つであり、うつ病における自殺や休業に伴う社会的損失は大きく、個人・社会へのインパクトは甚大であるといわれています。その一方で、臨床現場では一般には抗うつ薬による薬物療法が主な治療法となっていますが、比較的重くないうつ病に対する抗うつ薬の効果は十分でないことや薬物療法のみで改善しない患者が 30%程度いること等から、これらを補完する新たな治療法として認知行動療法が注目されています。

ます。

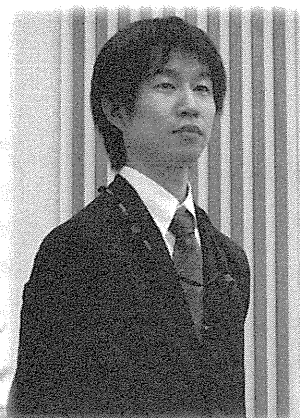
中川さんは、実証に基づく精神科医療の実践のために、日本国内にとどまらず海外との共同で認知行動療法に関する研究や研修を行っています。日本における認知行動療法に関する研究や研修について、これまでのエビデンスをどのように使い、そしていかにエビデンスをつくるのかを自らの経験を交えお話し頂きました。



NCNP Translational Medical Center  
Clinical Research Track

# TMCCRT倫理講座開催のお知らせ

## 利益相反問題の位置づけと 最近のルールの動向



東京大学 医科学研究所公共政策研究分野

助教 井上悠輔

昨年の1月28日に「ヒト試料の研究利用と倫理」について  
ご講演された井上先生です。

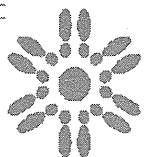
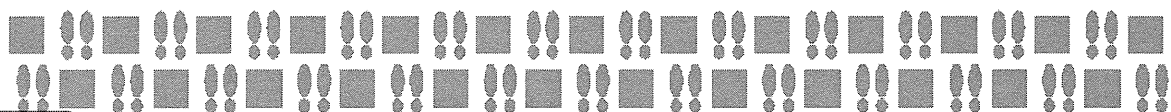
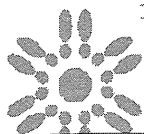
開催日時：2012年6月5日（火）

17：15～

場所：研究所3号館1階 セミナー室

トランスレーショナル・メディカルセンター

問い合わせ先：7821



# TMC CRT実践講座開催のお知らせ

## 研究者のための契約・知的財産(研究成果)に関する基礎知識

開催日：2012/05/18

開催時間：17:15～

場所：研究所3号館セミナールーム

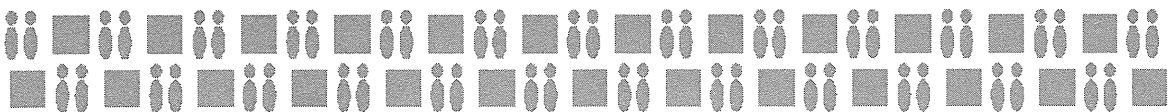
### 飯田香緒里 先生 profile

東京医科歯科大学  
研究・産学連携推進機構  
准教授 産学連携研究センター長  
国立精神・神経医療研究センター  
TMC ビジネスイノベーション室 顧問



- 2005年 東京医科歯科大学 知的財産本部 知的財産法務（契約）業務に従事
- 2008年 同本部特任助教
- 2009年 同本部 教育研究開発支援部門長（兼）
- 2010年 同本部 特任講師
- 2011年 同学 研究・産学連携推進機構、准教授・産学連携研究センター長、医学系大学産学連携ネットワーク協議会（medU-net）事務局長

トランスレーショナル・メディカルセンター 問い合わせ先：7821



# TMC CRT実践講座開催のお知らせ

## 文献検索のABC

研究の入門者やレジデントなどを対象とした文献検索に関するコツを一緒に勉強しませんか？

TMC 臨床研究教育研修室長  
中川 敦夫

開催日時：2012年6月22日（金）  
17：15～

場 所：TMC棟2階 会議室

トランスレーショナル・メディカルセンター

問い合わせ先：7821



# TMC CRT実践講座開催のお知らせ

## 色覚の多様性とカラーユニバーサルデザイン

東京慈恵会医科大学解剖学講座

教授 岡部 正隆

昭和44年1月生まれ 出身地 東京

平成5年 東京慈恵会医科大学 医学部 医学科 卒業

平成8年 同大学院 医学研究科 博士課程 修了 博士(医学)

平成9~17年 国立遺伝学研究所 発生遺伝研究部門 助手(広海健教授)

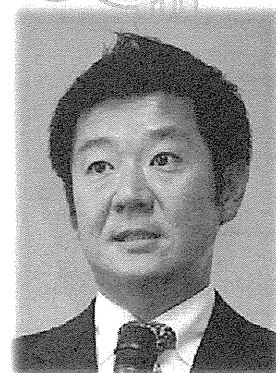
平成14~17年 キングスカレッジロンドン MRC 発生神経生物研究センター 客員講師  
(Prof. Anthony Graham)

平成17~19年 東京慈恵会医科大学 DNA 医学研究所 器官発生研究室 室長

平成19年~ 現職

平成15年11月 NPO法人カラーユニバーサルデザイン機構設立 同監事

平成22年1月 同副理事長



慈恵医大で解剖学の教鞭を取るかたわら、色覚のタイプの違いに関わらず情報が正確に伝わるように工夫した色遣い、すなわちカラーユニバーサルデザインの普及活動を行っている。自分自身がP型色覚(1型2色覚)であり、日常生活や研究活動の中で体験した不便の経験を活かし、学会発表での工夫、公共の色遣いやプロダクトデザインに対する助言を行っている。

開催日時：2012年6月29日(金)

17:15~

場 所：TMC棟2階 会議室

トランスレーショナル・メディカルセンター

問い合わせ先：7821



# TMC CRT実践講座開催のお知らせ

## 大規模データベースを 利用したがん疫学研究



鎌倉女子大学  
家政学部管理栄養学科

**講師 中谷 直樹**

【主な業績】  
Nakaya N, et al, Cancer, 2010  
Nakaya N, et al, Am J Epidemiol, 2010  
Nakaya N, et al, J Natl Cancer Inst., 2003

【受賞歴】  
平成12月11月  
麻布大学環境科学研究会 越智賞  
平成15年5月  
第3回 日本心身医学会 池見賞  
平成19年3月  
第7回 日本行動医学会 荒記記念賞

開催日時：2012年8月3日（金）  
17：15～

場 所：研究所3号館1階 セミナー室



トランスレーショナル・メディカルセンター

問い合わせ先：7821



## 患者立脚型アウトカムの測定：主観的尺度の開発と検証

講師 竹上 未紗先生

国立循環器病研究センター  
開発基盤センター

### 略歴

神戸大学医学部保健学科卒業後、京都大学大学院医学研究科にて修士、博士号を取得、京都大学医学部保健学科看護学専攻非常勤講師、京都大学医学研究科医療疫学分野助教を経て現在に至る。

専門は臨床疫学、アウトカムリサーチ、睡眠社会学

日中の眠気を測定する尺度（ESS）（Sleep medicine誌）、前立腺がんの特異的疾患QOL尺度（EPIC）（Journal of Urology誌）といった主観的尺度の日本語版開発のほか、これらの尺度を用いたアウトカムリサーチを行っている。そのほか、医療資源消費、生産性（Work performance）などの研究、睡眠時呼吸障害の簡易スクリーニングツールの開発（Sleep誌）といった臨床疫学の手法を用いた研究も行っている。

著書に、京都大学医療疫学分野福原教授と共著の「誰も教えてくれなかったQOL活用法（SF-36活用編）」（健康医療評価研究機構）がある。

日時：平成25年3月6日（水）16:00~18:00

場所：コスモホール

問合せ先 TMC事務 内線7821



独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター  
トランスレーショナル・メディカルセンター  
Translational Medical Center (TMC), NCNP

## Meet the Expert (公開講座)

演題：精神科臨床における  
Shared Decision Makingの可能性

講師：渡邊 衡一郎

Profile 杏林大学医学部  
精神神経科学教室 准教授

専門領域

臨床精神薬理 主に向精神薬の副作用・効果・アドヒアランス研究

所属学会

日本臨床精神神経薬理学会（評議員、指導医）

日本精神神経学会（専門医）

日本うつ病学会（評議員）

日本精神保健・予防学会（評議員）



日時：平成24年11月16日（金）17：15～

場所：国立精神・神経医療研究センター  
研究所3号館セミナー室

独立行政法人国立精神・神経医療研究センター  
トランスレーショナル・メディカルセンター事務局 内線：7821  
mail:tmccrt@ncnp.go.jp